

資 料

T梁に於ける繫筋の計算に就いて

正 会 員 治 田 源 三*

「鐵筋コンクリート」に於ける水平應剪力度 V_0 が許容剪力度 4.5kg/cm^2 を超過する場合は繫筋を用ひて其の超過水平剪力度を繫筋にて負擔せしむるものとす(別法として水平剪力度16割若くは5割を繫筋に負擔せしむる方法もある)

繫筋は「コンクリート」の應壓層より始まり主要鐵筋の全部若くは數本を巻き其の形はU形とし再び應壓層に至らしむるものであつて、普通用ひらるのものは丸鋼 $\phi 10\text{mm}$ 若くは $\phi 7\text{mm}$ とす、時に依りては帶鐵を用ふることがある。

普通の短形梁に於て荷重の大なる時は許容應剪力度 4.5kg/cm^2 を超過することがある、又T梁に至りては許容剪力度に近いが超過する場合少くない、故にT梁に於ては必ず計算して見なければならぬ。

1. 集中荷重ある場合の繫筋の算式

(1) 繫筋の所要面積を求むる算式

$$a = \frac{d, f \left(\frac{Q}{bjd} - 4.5 \right)}{fst} \dots\dots\dots (1)$$

上式中

a = 繫筋の總面積

fst = 繫筋の許容剪力度 (750kg/cm^2).....(建築規則に依る)

b = 幅

f = 繫筋の間隔

$\frac{Q}{bjd}$ 水平剪力度 (水平剪力度の算式は本筋に於ては省略す)

(2) 繫筋の間隔を求むる算式

$\phi 10\text{mm}$ の丸鐵筋を用ふるとき

$$f = \frac{1185}{\left(\frac{Q}{bjd} - 4.5 \right) b} \dots\dots\dots (2)$$

$\phi 7\text{mm}$ の丸鐵筋を用ふるとき

$$f = \frac{570}{\left(\frac{Q}{bjd} - 4.5\right) b} \dots\dots\dots (3)$$

誘導法：—

今 第一圖に於て或断面 A の垂直剪力を Q_1 とし B 断面の垂直剪力を Q_2 とす、其の距離を f とすれば A 断面の水平剪力度 V_{n1} は

$$V_{n1} = \frac{Q_1}{bjd}$$

B 断面の水平剪力度 V_{n2}

$$V_{n2} = \frac{Q_2}{bjd}$$

従つて f 區間の平均水平剪力度は

$$\left(\frac{Q_1 + Q_2}{2}\right) \frac{1}{bjd} \quad \text{にして}$$

f 區間の全剪力度は平均水平剪力度に f を乗じ更に幅 b を乗じたるものであることは明白である。

即ち f 區間の全剪力度 $= \left(\frac{Q_1 + Q_2}{2}\right) \frac{b \cdot f}{bjd}$

亦 Q を Q_1 及び Q_2 の平均値とすれば上式より

$$f \text{ 區間の全剪力度} = \frac{Qb f}{bjd}$$

水平剪力の超過量は

$$= \frac{Qb f}{bjd} - 4.5 b f$$

$$= b f \left(\frac{Q}{bjd} - 4.5\right) \dots\dots\dots (イ)$$

上記の超過量に對して繫筋を要するものなるにつき繫筋の斷面積を a とし許容剪力度を f_s とすれ $a f_s$ ばが超過量に等しい譯である。

$$a \cdot f_s = b \cdot f \left(\frac{Q}{bjd} - 4.5\right) \dots\dots\dots (b)$$

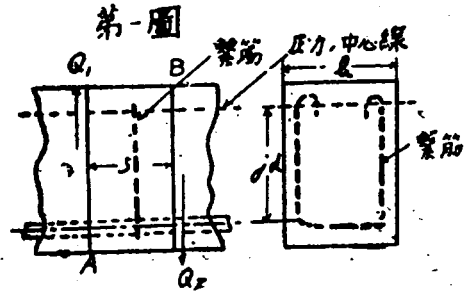
$$\therefore a = \frac{b \cdot f \left(\frac{Q}{bjd} - 4.5\right)}{f_s}$$

上式が即ち繫筋の斷面を決定する算式である

又繫筋の斷面を假定して區間 f を求むるには (ロ) 式より

$$f = \frac{a \cdot f_s}{b \left(\frac{Q}{bjd} - 4.5\right)} \dots\dots\dots (ハ)$$

實用上多く用ひらる繫筋は $\phi 10\text{mm}$ 若くは $\phi 7\text{mm}$ のものにして鐵筋の許容剪力度は 75 kg/cm^2 であるから、 $a \cdot f_s$ の値は豫め知れてゐる、而して普通之等鐵筋を U 形に曲げて使



用することに依り繋筋の兩側二箇所に於て抵抗することになり、断面 a は二倍となる。

故に $\phi 10\text{mm}$ のとき

$$a. f_{st} = 2A_s. f_{st} = 2 \times 0.79 \times 750 = 1185\text{kg}$$

$\phi 7\text{mm}$ ノトキ

$$a. f_{st} = A_s. f_{st} = 2 \times 0.38 \times 750 = 570\text{kg}$$

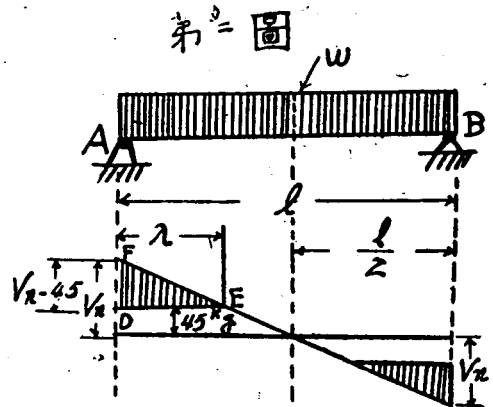
故に上式の兩値を (ハ) 式に代入すれば (2) (3) 式となる

2. 等布荷重を有する梁に於ける繋筋の計算

建築物の床土荷重及び橋梁上の群衆荷重を受ける梁は等布荷重を有する梁にして又建築物の桁梁構法に於ける梁に連続せる桁は集中荷重の理であるが「鐵筋コンクリート」に於ては桁なきものと看做して等布荷重として計算する。

又橋上を移動する荷重の各員の最大剪力圖表を作るに殆んど、等布荷重の剪力圖表と同形にして繋筋計算には等布荷重と看做して取扱ふも大差ない、故に多くの場合等布荷重を有する繋筋計算をなす。

今第二圖に於ける兩支承上に休止せる梁に等布荷重のあるときは水平剪力圖表は \sqrt{n} なる高さ $\frac{l}{2}$ となる底邊を有する三角形を以て之を示すことが出来る。



故に許容剪力度を 4.5kg/cm^2 とするときは之を差引きたる殘部即ち影線を施せる三角形にして其の高さは $\sqrt{n} - 4.5$ 底邊は $\frac{l}{2}$ の三角形である。

(1) 繋筋長の計算式

$$\lambda = \left(0.5 - \frac{2.25 bjd}{Q} \right) l \dots\dots\dots (4)$$

普通 $j=0.85$ とするが故に實用式は

$$\lambda = \left(0.5 - \frac{1.91 hd}{Q} \right) l \dots\dots\dots (5)$$

以上の式は許容剪力度を 4.5kg/cm^2 とし残りの超過部分を繋筋が負擔するときに用ひられる。

誘導法：

第二圖に於て

$$\frac{\frac{1}{2}}{V_n} = \frac{\lambda}{V_n - 4.5}$$

$$\therefore \lambda = \frac{(V_n - 4.5)l}{V_n} \dots \dots \dots (1)$$

然るに $V_n = \frac{Q}{bjd}$ であるから之れを(1)式に代入すれば

$$\lambda = \frac{\left(\frac{Q}{bjd} - 4.5\right)l}{\frac{2Q}{bjd}} = \frac{(Q - 4.5 bjd)l}{2Q} = \left(\frac{1}{2} - \frac{4.5 bjd}{2Q}\right)l = \left(0.5 - \frac{2.25 bjd}{Q}\right)l$$

此所に $j=0.85$ とすれば上式を變化して(5)式が得られる。

(2) 繫筋数の計算式

$$N = \frac{\beta \cdot b \cdot l}{a} \dots \dots \dots (6)$$

上式中 $\beta = \frac{(V_n - 4.5)^2}{3000 V_n}$ にして β の値を第一表に示す
但し $f_{st} = 750 \text{kg/cm}^2$ とす

繫筋は實用上常に使用せらるゝU形繫筋とし其の經を 10mm とすれば

$$N = 0.633 \beta \cdot b \cdot l \dots \dots \dots (7)$$

同様に $\phi 7 \text{mm}$ とすれば

$$N = 1.32 \beta \cdot b \cdot l \dots \dots \dots (8)$$

上式中

N = 張間半分に於ける繫筋の數量

a = 繫筋一組の斷面積 (U形なる場合は斷面積の二倍)

l = 張間 (cm)

誘導法: —

繫筋を要すべき張間半分に於ける水平剪力の總量を Q' とすれば

$$Q' = \frac{1}{2}(V_n - 4.5) b \cdot l$$

A_s = 所要鐵筋量とし許容剪力度を 750kg/cm^2 とすれば

$$A_s = \frac{Q'}{750} = \frac{(V_n - 4.5) b \cdot l}{2 \times 750} \dots \dots \dots (1)$$

然るに $\lambda = \frac{(V_n - 4.5)^2 b \cdot l}{2 V_n}$ であるから之を上式に代入すれば

$$A_s = \frac{(V_n - 4.5)^2 b \cdot l}{3000 V_n a} \dots \dots \dots (2)$$

$$\therefore N = \frac{A_s}{a} = \frac{(V_n - 4.5)^2 b \cdot l}{3000 V_n a} \dots \dots \dots (3)$$

此所に $\frac{(V_n - 4.5)^2}{3000 V_n} = \beta$ とすれば

$$N = \frac{\beta \cdot b \cdot l}{a} \text{ となる } \dots \dots \dots (=)$$

次に繫筋に丸鋼 $\phi 10\text{mm}$ を用ひ U形とすれば断面積は $2 \times 0.79\text{cm}^2 = 1.58\text{cm}^2$ となり、之を(=)式に代入すれば

$$N = 0.633 \beta \cdot b \cdot l$$

又 $\phi 7\text{mm}$ を用ひ同様に U形とすれば断面積は $2 \times 0.38\text{cm}^2 = 0.76\text{cm}^2$ となり、之を(=)式に代入すれば

$$N = 1.32 \beta \cdot b \cdot l \quad \text{となる}$$

第一表 繫筋計算表 (β の値)

\sqrt{n}	β	\sqrt{n}	β	\sqrt{n}	β
4.6	0.000234	6.4	0.000205	8.2	0.000581
4.7	625	6.5	224	8.3	604
4.8	109	6.6	231	8.4	637
4.9	167	6.7	259	8.5	652
5.0	235	6.8	278	8.6	676
5.1	314	6.9	298	8.7	701
5.2	403	7.0	317	8.8	726
5.3	500	7.1	338	8.9	745
5.4	606	7.2	358	9.0	775
5.5	716	7.3	378	9.1	800
5.6	842	7.4	400	9.2	824
5.7	972	7.5	421	9.3	850
5.8	0.000111	7.6	443	9.4	875
5.9	125	7.7	465	9.5	902
6.0	140	7.8	488	9.6	929
6.1	155	7.9	510	9.7	955
6.2	171	8.0	534	9.8	982
6.3	188	8.1	557	9.9	0.001011

(3) 以上に依りて繫筋の数を見出すことが出来た、次に斯くして求めたる所の垂直繫筋の配置法を求めんとす、今繫筋の配置を算出する式を示すと次の様な算式である。

$$A\text{端より } (n-a) \text{ 番目} = n\lambda \dots\dots\dots (9/a)$$

$$\alpha = 1 - \frac{1}{\sqrt{n}} \left(\sqrt{a+1} - \frac{\sqrt{a} \sqrt{a+1} - a+1}{3(\sqrt{a} + \sqrt{a+1})} \right)$$

上式中 n = 張間の半分に配置すべき繫筋数

a 及び $a+1$ は第三圖の如く c 点より計り梯形の兩邊に至る迄の距離

前式の α の値を一々計算する勞を省くため之を第二表に掲ぐ

A端より最終の位置

n 番目 = $\alpha \cdot \lambda$ (9のb)

$$\alpha = \left(1 - \frac{0.667}{\sqrt{n}} \right)$$

α の値は第二表に掲ぐ

誘導法：—

第三圖に於ける剪力圖表の影線を施せる三角形 a'ca' (即ち第四圖の三角形FDE)は繋筋の負擔すべき總水平剪力である。

故に此の三角形を Nの數丈けの等積に區分したる各部の重心點に適應する箇所に一つ宛繋筋を配置するのである。

此の三角形を N個の導積に區分するには數の平方根を利用し求め得られる。

今使用せんとする繋筋の數丈け數 1 より始めて各その平方根を求め、第四圖に於て

ED = λ とし Eに立てたる垂直線上に適宜の「スケール」を用ひて $\sqrt{1}, \sqrt{2}, \sqrt{3}, \dots, \sqrt{N}$ の値を置き最後の平方根例へば圖に於て $\sqrt{6}$ と D' とを結び更に各平方根の値を有する $\sqrt{5}, \sqrt{4}, \dots$ 等の各點より之れに平行線を引くときは、その D'E' に合する點 1, 2, 3,より立てたる垂直線は三角形 DEF を N個 (圖面の場合には6個) の等積を有する部分に區分する。故に此の區分せられたる梯形の重心點より下せる垂線が繋筋の位置である。

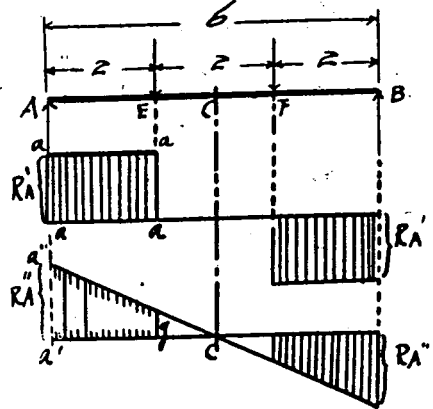
以上の關係及び第四圖の相似三角形の理より次式が成立す

$$\frac{\sqrt{n}}{\lambda} = \frac{\sqrt{a}}{\lambda} \quad (\text{但し } \sqrt{a} \text{ は } \lambda a \text{ の所の高さ})$$

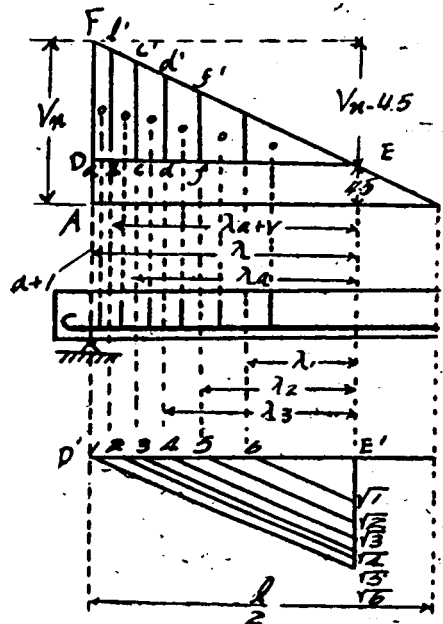
$$\therefore \sqrt{a} = \frac{\sqrt{n} \lambda a}{\lambda} \quad \dots\dots\dots ()$$

次に $\frac{\sqrt{n}}{\lambda} = \frac{\sqrt{a+1}}{\lambda a+1}$ (但し $\sqrt{a+1}$ は $\lambda a+1$ の所の高さ)

第三圖



第四圖



$$\therefore \sqrt{a+1} = \frac{\sqrt{n} \lambda a + 1}{\lambda} \dots\dots\dots (\square)$$

$$\text{又 } \lambda a + 1 : \lambda = \sqrt{a+1} : \sqrt{n}$$

$$\therefore \lambda a + 1 = \frac{\lambda \sqrt{a+1}}{\sqrt{n}} \dots\dots\dots (\heartsuit)$$

同様にして

$$\lambda a = \frac{\lambda \sqrt{a}}{\sqrt{n}} \dots\dots\dots (=)$$

次に梯形 bb' cc' の重心を求むるには

$$\text{梯形 bb' cc' の重心} = \frac{2\sqrt{a} + \sqrt{a+1}}{\sqrt{a} + \sqrt{a+1}} \times \frac{\lambda a + 1 - \lambda}{3} \dots\dots\dots (\diamond)$$

此所に於て (イ) 式の λa に (=) 式を代入すると

$$\sqrt{a+1} = \frac{\sqrt{n} \frac{\lambda \sqrt{a}}{\sqrt{n}}}{\lambda} = \frac{\sqrt{n} \sqrt{a}}{\sqrt{n}} \dots\dots\dots (\sim)$$

又 (b) 式の $\lambda a + 1$ に (ハ) 式を代入すると

$$\sqrt{a+1} = \frac{\sqrt{n} \frac{\lambda \sqrt{a+1}}{\sqrt{n}}}{\lambda} = \frac{\sqrt{n} \sqrt{a+1}}{\sqrt{n}} \dots\dots\dots (\text{ト})$$

(ホ) 式に (～)、(ト) 及び (ハ)、(=) 式を代入して梯形の重心を表せば

$$\begin{aligned} \text{梯形重心の距離} &= \frac{\frac{2\sqrt{n}\sqrt{a}}{\sqrt{n}} + \frac{\sqrt{n}\sqrt{a+1}}{\sqrt{n}}}{\frac{\sqrt{n}\sqrt{a}}{\sqrt{n}} + \frac{\sqrt{n}\sqrt{a+1}}{\sqrt{n}}} \cdot \frac{\frac{\lambda\sqrt{a+1}}{\sqrt{n}} - \frac{\lambda\sqrt{a}}{\sqrt{n}}}{3} \\ &= \frac{\frac{\sqrt{n}}{\sqrt{n}} (2\sqrt{a} + \sqrt{a+1})}{\frac{\sqrt{n}}{\sqrt{n}} (\sqrt{a} + \sqrt{a+1})} \cdot \frac{\frac{\lambda}{\sqrt{n}} (\sqrt{a+1} - \sqrt{a})}{3} \\ &= \frac{2\sqrt{a} + \sqrt{a+1}}{\sqrt{a} + \sqrt{a+1}} \cdot \frac{\lambda (\sqrt{a+1} - \sqrt{a})}{3\sqrt{n}} \\ &= \frac{(2\sqrt{a} + \sqrt{a+1}) (\sqrt{a+1} - \sqrt{a}) \lambda}{3 (\sqrt{a} + \sqrt{a+1}) \sqrt{n}} \\ &= \frac{\lambda (2\sqrt{a}\sqrt{a+1} + \sqrt{a+1}^2 - 2\sqrt{a}\sqrt{a+1})}{3\sqrt{n} (\sqrt{a} + \sqrt{a+1})} \\ &= \frac{\lambda (2\sqrt{a}\sqrt{a+1} + a + 1 - 2a - \sqrt{a}\sqrt{a+1})}{3\sqrt{n} (\sqrt{a} + \sqrt{a+1})} \\ &= \frac{\lambda (\sqrt{a}\sqrt{a+1} - a + 1)}{3\sqrt{n} (\sqrt{n} + a + 1)} \end{aligned}$$

次にA端より $n - (a+1)$ 迄の距離は

$\lambda - \lambda a + 1$ である

$$\therefore \lambda - \lambda a + 1 = \lambda - \lambda \frac{\sqrt{a+1}}{\sqrt{n}} = \lambda \left(1 - \frac{\sqrt{a+1}}{\sqrt{n}} \right)$$

第二表 緊筋配置表 (α の値)

緊筋名	1 番目 α	2 番目 α	3 番目 α	4 番目 α	5 番目 α	6 番目 α	7 番目 α	8 番目 α	9 番目 α	10 番目 α	11 番目 α	12 番目 α	13 番目 α	14 番目 α	15 番目 α	16 番目 α	17 番目 α	18 番目 α	19 番目 α	20 番目 α	
1	0.333																				
2	0.149	0.537																			
3	0.100	0.306	0.614																		
4	0.075	0.200	0.400	0.666																	
5	0.063	0.197	0.286	0.465	0.703																
6	0.063	0.143	0.266	0.347	0.510	0.728															
7	0.063	0.135	0.208	0.321	0.397	0.548	0.749														
8	0.054	0.135	0.204	0.373	0.377	0.455	0.576	0.769													
9	0.043	0.101	0.167	0.254	0.301	0.400	0.467	0.600	0.778												
10	0.038	0.097	0.147	0.210	0.273	0.336	0.431	0.494	0.621	0.790											
11	0.037	0.084	0.137	0.187	0.247	0.308	0.368	0.458	0.518	0.639	0.800										
12	0.037	0.075	0.133	0.169	0.220	0.277	0.335	0.393	0.480	0.538	0.653	0.807									
13	0.037	0.068	0.114	0.162	0.199	0.252	0.307	0.363	0.418	0.501	0.557	0.668	0.815								
14	0.037	0.065	0.098	0.146	0.198	0.226	0.279	0.332	0.386	0.439	0.519	0.573	0.680	0.822							
15	0.035	0.061	0.097	0.138	0.174	0.226	0.252	0.303	0.355	0.407	0.458	0.536	0.587	0.690	0.828						
16	0.035	0.056	0.089	0.125	0.150	0.200	0.250	0.275	0.325	0.375	0.425	0.475	0.550	0.600	0.700	0.833					
17	0.033	0.052	0.087	0.135	0.150	0.174	0.222	0.271	0.295	0.344	0.392	0.441	0.490	0.563	0.611	0.708	0.838				
18	0.032	0.051	0.085	0.113	0.150	0.174	1.098	0.245	0.292	0.316	0.368	0.410	0.447	0.504	0.575	0.622	0.717	0.843			
19	0.032	0.051	0.084	0.107	0.130	0.174	0.198	0.221	0.267	0.313	0.336	0.333	0.427	0.473	0.519	0.588	0.634	0.725	0.847		
20	0.024	0.049	0.082	0.107	0.138	0.169	0.194	0.216	0.238	0.238	0.338	0.350	0.395	0.440	0.485	0.530	0.597	0.642	0.731	0.851	

∴ A端より (n-a) 番目の梯形の重心迄の距離は

$$\begin{aligned} (n-a) \text{ 番目} &= \lambda \left(1 - \frac{\sqrt{a+1}}{\sqrt{n}} \right) + \lambda \frac{\sqrt{a}\sqrt{a+1} - a + 1}{3\sqrt{n}(\sqrt{a} + \sqrt{a+1})} \\ &= \lambda \left[1 - \frac{\sqrt{a+1}}{\sqrt{n}} + \frac{\sqrt{a}\sqrt{a+1} - a + 1}{3\sqrt{n}(\sqrt{a} + \sqrt{a+1})} \right] \\ &= \lambda \left[1 - \frac{1}{\sqrt{n}} \left(\sqrt{a+1} - \frac{\sqrt{a}\sqrt{a+1} - a + 1}{3(\sqrt{a} + \sqrt{a+1})} \right) \right] \end{aligned}$$

∴ $1 - \frac{1}{\sqrt{n}} \left(\sqrt{a+1} - \frac{\sqrt{a}\sqrt{a+1} - a + 1}{3(\sqrt{a} + \sqrt{a+1})} \right) = \alpha$ とすれば (9a) 式となる

次にA端より最終番目の繫筋は三角形 ff'E の重心である。

故に高さ λ_1 の底の邊より $\frac{1}{3}$ の所にある。

$$\sqrt{1} : \sqrt{n} = \lambda_1 : \lambda n \quad \text{より}$$

$$\lambda_1 = \frac{\sqrt{1}\lambda}{\sqrt{n}} = \frac{\lambda}{\sqrt{n}} \quad \dots\dots\dots (チ)$$

$$\frac{\lambda_1}{3} = \frac{\lambda}{3\sqrt{n}}$$

故にA端よりは

$$n \text{ 番目} = \lambda - \lambda_1 + \frac{\lambda}{3\sqrt{n}}$$

上式の λ_1 に (チ) 式の $\frac{\lambda}{\sqrt{n}}$ を代入すれば

A端より計りて

$$\begin{aligned} n \text{ 番目} &= \lambda - \frac{\lambda}{\sqrt{n}} + \frac{\lambda}{3\sqrt{n}} = \lambda \left[1 - \frac{1}{\sqrt{n}} \left(1 - \frac{1}{3} \right) \right] = \lambda \left(1 - \frac{2}{3\sqrt{n}} \right) \\ &= \lambda \left(1 - \frac{0.667}{\sqrt{n}} \right) \quad \dots\dots\dots (リ) \end{aligned}$$

$\left(1 - \frac{0.667}{\sqrt{n}} \right) = \alpha$ とすれば (91b) 式となる

(以 上)